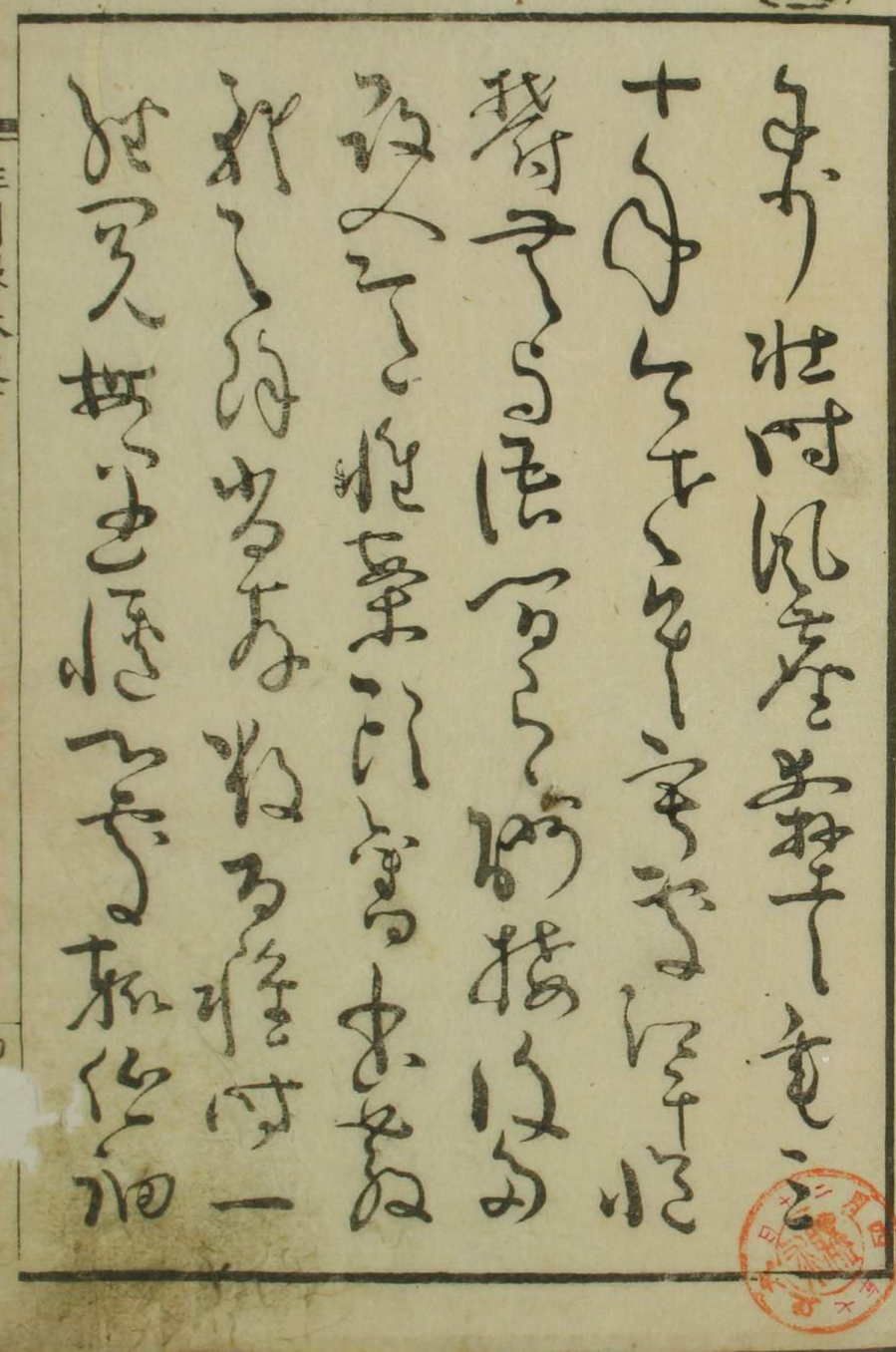
高說排問録 前集

特別
21
2460
1

門へ二21
號 2460
巻 1-12

慶長見聞集 巻之一

尾定



なるハ俳諧ハ余念なく寂
巻を探ハ深く此さを粧へしき性
思ひ寄られて歌口押て分書
ごと一丸を背かぬ心を得て新
了を得て形も人の為に其く
気ら扶して支援る中傳ひ

ハ押口後ろ或綺麗なる人に誘
因て性位ふに近衣打請
世強為に傳役る恐れ云ふ
こそ東和田勝頃なる精
出清生て足中良所の後
ぞ詠ハなくしてやさの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]說排悶錄敘

六藝園爲以彰學問之日久矣數
下響應千里寄[illegible]以求[illegible]
時詩無[illegible]之評[illegible]
謂[illegible]博綜[illegible]
社用東印之德海西土之[illegible]
[illegible]人破[illegible]而美[illegible]情[illegible]之謂又[illegible]

言語之味之可味者出於君山清人
孤味抗同深十二年求詩爾清其清其
之摘深的清二三百年出之軼同者
益於世道人心無益之味益深慨激世之
士每之有所憤同歸而抵之所之
使搜之摘於筆墨年譜釋出於世之事
之所表蘇之彼者之信到歸我使出

表深摘墨匯減于同之昭於彩於百
年之吳城之和之易後而能又之
姻人堅之破法而吳激情而雷之有益
於世道人心乎世人同之爾之
風流之味是出出又出之風流之味
之本於之味之味矣爾於東港余居東港
以之居甚通乃和年就拔是出因贅

一言於巻端

文政丙戌孟冬大村顯撰于銃砲南港適園

應用之而最需　本間游清書

排問録

[illegible]

まへとりにことをさすの夜棊の
箱まうひきてけいらをしへとも寄まく
常にかけりこれはのれはきよひけんと
いひてかきいろはえてかつあるのらき
てわうきまの本ともかけつ給をまく
こえふうすへあしてつ猿のわんはにし
もにのことあつれそかはしまきしきこ
ちまかをわくてりワクへのかうろ

ちわけにあるくりつるこそわかくまれなとし
へのえしこも好すまんは、常との雑信をと
りへつきはまよさえ子しわの箱のまのまれ
すまわせつえつね人とは、れのれうえふきとや
おしめへのえんはのなうたらなはくしや

竹樹

奇説排悶録 第一輯全本 六卷總目録

卷之一

孝行之部

啞孝子　孝丐
鬼孝子　冷孝子
于江　珊瑚

卷之二

忠義之部

張夫子　閻典史　張斐　歐敬竹　石士鳳
凌国俊等九人　蕭効用　孔四郎　費宮人
呂尼　瓊枝曼仙　義象塚　義牛　義馬
秦氏犬　義犬　毘陵猴　義鶴　黿

卷之三

貞烈之部

黄善聰　倪氏　嚴貞烈　張貞女　許烈婦
二烈　張烈婦　鄭氏　徽賈妻妾　林氏
金三妻　汪來姐　秀水賊犯女　劉盼春
高三　許氏鶴　鷄

卷之四

友愛之部

張誠　武君仕　達州民

仇大娘　童氏犬

卷之五

高誼之部

熊公　武林高士　張文　雪遭　董繼芳

新安商　陸采侯　王福徵　旅次監生　哈九

黃中　寶婺生傳

卷之六

璣行之部

龔翊　張復　蘇門三賢　劉以平　韓增

張二　亟儘　趙遜　安成乞　徐妙錦

萬義顓　沈雲英　賣腐人女　益都人妾

排門錄前輯總目畢

排門錄後輯題目

明斷之部　義俠之部　玩世之部　仙緣之部　靈異之部

總計本數十有二冊

奇説排門録巻之一

孝行之部

目録

唖孝子
孝丐
鬼孝子
冷孝子
于江
珊瑚

巻七下

明斷之部

楊退菴　于總制　于中亟
李大守　魯大守　費公
大原獄

巻之八

義俠之部

錦衣獄賈　五人傳　髯參軍傳　崔猛
附舟人　義盜　雲娘　飛瓊　義虎傳
大鳥

排門錄總目畢

卷之九

玩世之部

申殷張　史癡　宋連璧　烏程夜遇　陶成
狗皮道士　雌雌兒　武風子　劉酒　周鐵墩

卷之十

仙緣之部

尹髻頭　王探花　蘇姓　楊忠烈　李焞
成御史　汪希文　河南某縣仙　薛衣道人
趙如如　松祖　羅道人　崂山道士　宋道人
張谷山　邱生

卷之十一

靈異之部

吳二　雷殛逆子　賣米者　雷異三條　博興女
陶琰　俞保　神告記　周侍御　謝在杭
義優　義虎

奇説排門録巻之七

明斷之部

目録

舟人呼商妻
詩讖
臙脂

東洋文化研究所

奇説排門録巻之一

六樹園翁　譯

孝行之部

啞孝子

崔長生ハ崔ハ姓長生ハ名邛州国の人なり。生まるゝ時の瘖なれ共。其性至孝なり。時の人。啞孝子とぞ。此孝子。啞なれ共。人ふみを学ぶ。且元傭工をなす。其父母を養ふ。常ハ家を出入するとき必父母ハ見えざるなり。紀亥の歳。淮徐地名の間五穀熟せざり。孝子市ハ出て食を乞。人是を憐れむ。糟糠糝糒の類を。與へ給へば。受て單の中ハ入置き。我ハ草を掘り。木皮を剥て食とす。家ハ帰りて足を疾る父と。病る母を扶て。第簷の下ゆく。單中の物を取出て。父母ハ進む。斯なること日々ハ一ツ。單常ハ空しくなれば。父母是ハ依て

死せんとして在り。孝子途を行く。文字書ける反古なり。落散して成らざるべし。必是を拾ひとり。朔日十五日の時に至りて先聖を祭りて孔子の靈廟櫺星門樓の下に行くかの字蹟を燒く其爐をとりて黄河に流しそそぎとなれ一日拾ひ房紙中に遺金あるを失ける人やあらんと守りて失ける人を待ども其人を見ず一月過ぎて此金にて母親を買て飼やしなふに此親あやまて子を生つけぬ莉ゆく遂に父母の衣棺をも作りとり是より前知州事なる孫侯賢と云る人官に在て卒しなる成本國へ帰葬せんとするに交遊の者一人も葬送る者なかりしに此孝子只一人靈輀を拜して徒跣にて百里の遠き成送行て返り来け其父母殁せる時哭して働て三日食せず自柩を舁て中野にて葬る後其終る所を知らざりとなん

孝丐

丐は其邑里を知らず明の孝宗の時吳の市に在て乞食を此丐得所の食大方は食ひ尽しても分て竹の筒又籠の中に貯へ見る者不審に思ひて其故を尋ければ丐が曰吾母あり是に遺らんが為なりと云けり事を好む者其説の實否を窮めんとて跡に付き行くに五里許あり川山岸の竹樹えだ〻房邊に敝舟あり柳の陰に繋ぎ舟を敝けば乞ども〻潔げなり若嫗一人其中に座せり丐地に坐して貯へ飲食を出して整へ捧て舟に登て酒食を陳ね跽て母に進む母の杯を擧るを伺て起て唱歌し児の如く戯て母を娛しむ扨其母のありさまを成るよりと樂て心よげなり母食し止て又外に出て食を求む一日

例の如く亡ありけども食を得ざるに憂ふる甚しく沈孟淵と云
隠君子ありなる人甚く食を與へる上少く助力しそ遺る丐ひを
已餓死ども母の食を與へざる以前より聊も食ふ事をせず斯る事
年あり母遂に死る丐そ人より行方なくなりぬ此丐ひ沈姓
なりと云る年八三十なりゆくぞ在しとる

鬼孝子

閩中の国の名鬼孝子と云者ありし生れ七八歳の比父に外に在て死し
家は畜へる粮あり孝子幼少なれども已が力の限を出して業を勤め母
を養ふ孝子母をして其室に安らしめんの外を他に志なし孝子や
死せんとする比某氏の女に聘を遣り置ていまだ娶らざるを想ふに

孝子疾ありやまく身うせぬ是より母一人なる所なくなりしに鄰人某
かの母を娶んと思ひ媒者を呼て曰汝鄰の婦人に言へ汝が夫死して年
久く汝が子又卒して亡びぬ汝が家三尺の童子なり其上衣食なきを
汝何を以自終らんとする吾汝と老を偕にせんと欲を汝そを是を許さんや
媒者此を聞て悉其母に告ぐ母の意なを許さんと云へり此夜母の室
中に孝子の声嗚々然として腸を環やまく母に告て曰兒死せりと雖兒が
公はやがて死ぬべき兒と母と其形は相隔へるども其魂は相依るり今隣人吾母
を奪ふんとす吾母将是を許さんとして王ぬや母歎て哭て曰身を失ふん
豈吾のみなりの志なんや始め汝が父死王へども汝あり吾を養へる今汝
死せり吾なる何をか頼ん汝我が為の謀を我何を以て世を渡らん孝子

日兒が生る時寔に力を以て母を養へり其時餘力ありて某氏の女を聘せり
ト云ふ兒不幸にして早く身まかりて母の依玉に所なし某氏吾聘物を帰せ
ぐ母の為に計るべし母曰某氏聘を帰さんといふ如何にせん孝子曰
兒彼に語るべしとして此夜ひそかに某が家に異なる事あり驚きさた
に受て聘物を倍償て其母を帰しぬ此財によりて月日を送りぬ三
年ばかり経て財皆なくなりぬ母ひそかに孝子の堀を呼て之を告げる孝
子が曰兒生てよく力を以吾母を養へり死しても亦よく力を以て五口母を
養ふべし母が云汝すでに鬼となりていかんぞ力を以て我を養ふ孝子曰母
市中に行て物擔者を見るべ語て告べし汝平日擔ところの荷を倍して
擔へ吾兒汝を佐くべしと云玉へ母其ことを市に入て擔者に逢てこと

語る擔者の曰汝が児をでに死せりいかぐ吾擔ふ所物を佐くんや母ちなむ是
を試よと云擔者つひに一倍の荷を擔ふ孝子陰に添て佐ける故に擔
者疾走るに平日の如し因て得る所の銭を以て半を其母に與ふ孝子
日々に擔者を佐ける母是が為に安く世を過りて死に至りぬとぞ
嗚呼孝子なる哉父死して後ち母を養ひ身死して後ち精魂其
母を周旋して母をして生平の節を全くせしめ其上死力を以て荷を持て
母を養ひ老に至らむそも孝子の德なる死も間ざる所なるか

冷孝子

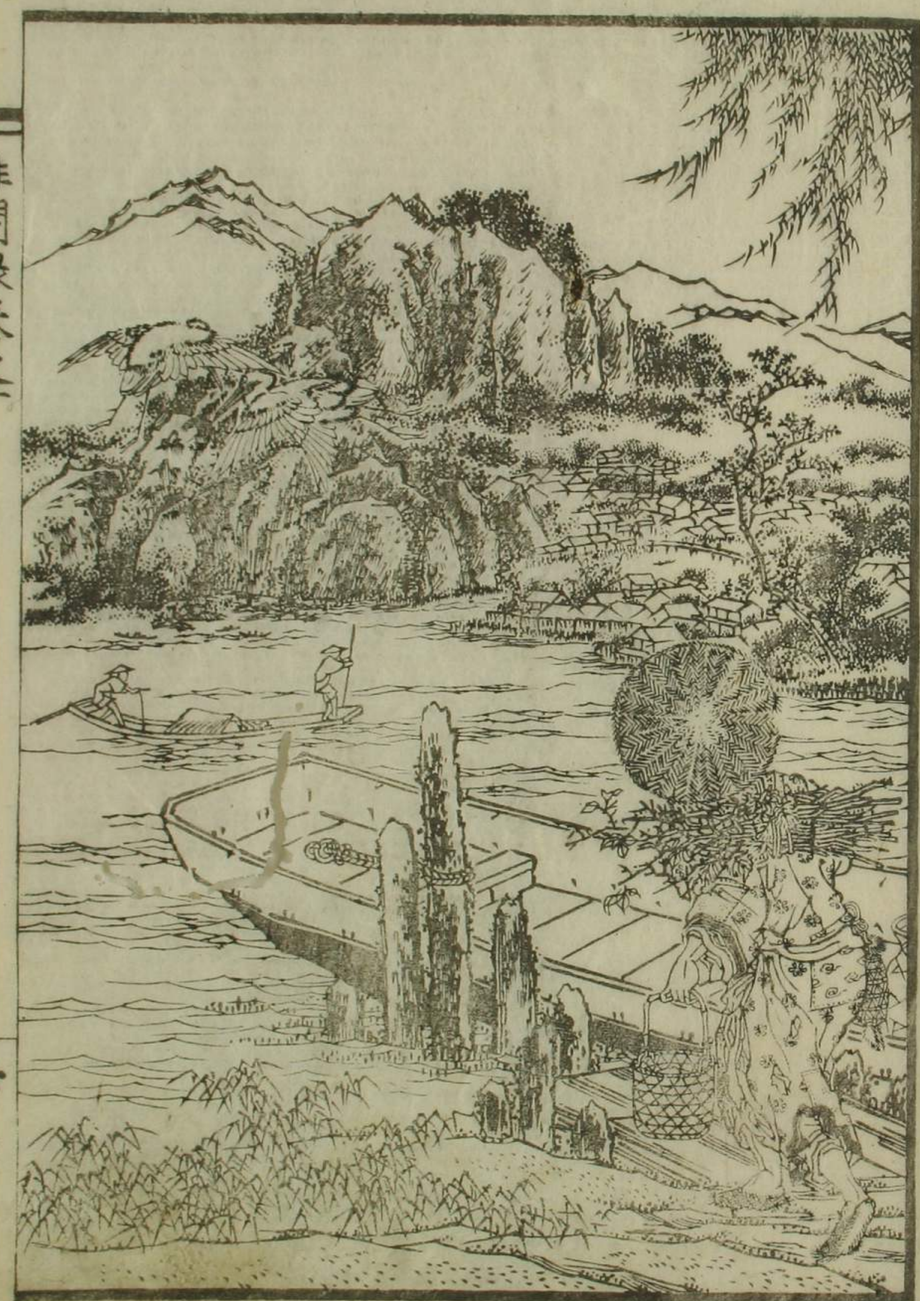
冷孝子は名を昇と云て益都顔神鎮の人なり諸生儒者なりて父の植元
人の名遠遊を好て明の崇禎十二年己卯歳嶺表地名に行て帰らず夫

より世の代やあゆく兵亂の為に隔らるゝ三十年ゆも及けるべ孝子想
こゝろく啓筆慶道の趙君韞趙氏の人君韞が名に身を寄て從て端州に行て父の在
所を訪んとて或日山東の人喬某と云者西界の方に往んとゝと聞て孝子
彼んぬるに父の行方を尋問ん事を頼む其より一年を経て喬某返来て
曰微に聞に足下の父は龍州の土司庄屋とゝりて歿せられゝと云孝子聞て趙
君韞を辭し別を告て出こゝつ先祥柯江江の名に溯て三百七十餘の難を
歴て横州より南寧地名に達り又遷隆思明地名を経て行事五千里ばかり茲
ゆくりとの人蔡氏鄭氏の二叟に遇ふ此両人も父と共に舊龍州の土司を勤
る者なり其より連ぢて往ばゞ又葬師の譚姓なる者に遇て
ふゝく龍州の北門なる交帶橋の側に於て父の櫬を見る哀を得て骸骨

を負て家に帰る孝子自其始末を叙て龍州扶櫬記と云文を作る

于江

郷民に于江と云者あり其父田間に宿て計らぬ狼に食る時に于江が
年十六なり父の履物を遺て居るを見て悲泣て死せんとを夜に
母の寢ぬる後に俟て潛に鉄錘錘は謂之權。和名抄を持て家を出父の死せ處に
行て父の讎を報んとを少間あって一ッの狼来て立ちわらって于江を嗅ぐ
あとゞも于江身を動さゞ居るを見て尾を揺て額を掃に又うつ
むきて于江が股を舐るを見て身を動さるを見て躍て来て其
額を齧んとを于江を蹴て錘を以て狼の腦を繫るに立ちろに斃る狼
取て草むらの中に入おきて少間あって又一ッの狼出来ぬ前の如くしてとを



孝丐呉の市中ゐ在く母戎敝船ゑ負へあふ圖

あるとをも艶しく干江臥て夜半に至りたる狼のごく来ざるべ少しく睡るる程に夢に父の来て曰汝二つの狼を殺せ少しく我恨をはらすべしとも我を殺せるものハ彼二物にあらざる鼻の白き狼なりと伐餘るとと云干江夢さめて又臥て夜の明るを待居るとど来ざりしかを得ざりし二物を曳て帰らんとせしが母の驚死るん事を恐れて諸を組井に投入れて帰るに其夜復彼處に往て俟に亦至るものなし斯るるの三四夜にして忽ち二つの狼出来て干江が足を齧て曳き行とと数歩を棘に肉を刺されて石ゆと膚を傷るとも干江ちらえ忍びて死せる者のやうを狼干江を地上に置て腹を齧んとする時驟に鎚を以て打仆し連ね打て遂に殺せりとて視るべ真に白鼻なりしを買て家に帰て始て母に告るとべ母ハ注て嘉ろこびて、共に組井に至りて二狼を探て帰て来るとなり

珊瑚

安大成ハ重慶地名の人なり父孝廉早く卒しぬ弟ハ二成と云て年いまだ幼し大成が妻ハ陳氏ゆく字を珊瑚とのべて大成が母ハ沈氏なり其性ひがみて情あらざ常に珊瑚を罵辱むるとも珊瑚怨める色を為ず朝ごに早く起て身の炊ひしく夫姑に見ても折しも大成をこく疾ことあるべ母ものこと珊瑚が淫を誨るるとく痛く詬責珊瑚ものこと孜を為ずしく進めべ母ものこと怒るに甚大成のとろ孝子なるべ呵て珊瑚を鞭うに母の怒少しく解て此ろ母まもなく珊瑚を憎む珊瑚ぴを盡しく仕るとも母一浴を交ざるに大成母の怒て戒知てく常に他所に宿てく妻と共に寝ざ斯ても母のぴをさやらざ

物事に付て怒り罵る其意らも珊瑚が身上にあり大成が曰妻を娶るに
母に仕へしめん為也然るに斯母の心に合ざるべ何を以て妻と為さんと云て遂に
珊瑚を出さと老嫗をして送らしめて里門を出んとする時珊瑚泣て曰女子と
生まれて人の婦と為る事あらはと何を以て我雙親に見えんや外邑
と云て袖の中より剪刀を取出し喉を刺て老嫗あるを抱をるに血溢て
襟を沾すに至るかゝる大成が嬶の家に連れ往て預けぬ此嬶
王氏ゆく寡居ゆく居り老嫗帰て大成に告げるべ大成さると他に娶る
ある事と言の日を経るうち珊瑚が創を癒く平らに成ぬと知て大成王氏が門
に赴くに珊瑚を留め王氏に入れと云へば大成入り
ざるに但珊瑚を逐出さんるを待ての時に珊瑚出て大成を見て問て曰

妾に何の罪ありてか出し王氏や大成が曰汝母に事るとあるべ也
と云ふ珊瑚答る事あるに惟首を俯して泣く泪ほとぐく赤くて
素絲を紅に染めぬ大成も心くるしくて詞を盡さしく退き帰ぬ
数日あるく母此由を聞怒て王氏が宅に至て悪言をのく王氏を罵る
王氏もあらえず沈氏が惡を数へいひて又曰汝が娵已に離別せるべ娵に非
ず我陳氏の女を家に養つて安氏の娵を養つるに汝他人の上を言ふ
るあるべと云沈氏此一言に返さべ荒て又王氏が勢ひにかちけ大に哭
して家に返て珊瑚安さに他所に適んるを恐に茲に又大
成が母の妹に干媼と云あて年六十に餘て子をさへざく唯をさる孫
と寡ある媳とのみゆく暮し居り此干媼て珊瑚が志を知るべ

珊瑚王氏ゆ別れて干媼が門ゆ来て身を寄せて干媼一々其由を問て
曰我妹子の皆暴ゆを起せり我汝を送り還さべーと云へば珊瑚かて是
を止め且吾此處ゆ在るゆ告王ゆ支ゆ之と言て其より干媼が宅ゆ居
て日を送りゆを珊瑚両人の兄ある聞て憐ぶて外ゆ嫁せーめんと欲れ
ども珊瑚ふつゆ従ゆど唯干媼が傍ゆ在て紡績を事とーて日を度せり
大成婦を出ーて後母所々の人を頼て大成が為ゆ婦を迎へんとすれども母
の心悪きゆを人傳へて噂ーるを聞べ誰人か婚を為さん然るゆ二四年を
過ーぬるゆ二成ゆ生長ーて臧姑と云る妻を迎るゆ此臧姑驕悍ゆ
支母ゆ倍せり母怒るゆ色を以てすれば臧姑怒るゆ聲を以てすれば二成懦弱
ーて妻の言ゆのみ従ゆ是より母の威漸くゆ減ぜて反て嫁の意ゆ従

ぜれども媳の意ゆ叶ふゆ難ーて臧姑母を使ふ支婢の如くを大成敢て言
ず母と相對ーて泣のみ母遂ゆ欝積の疾ゆ病て床ゆ臥を起臥の介抱
て大成一人ゆて為せべ晝夜寐る支能ざ両眼盡赤くなれり弟を呼て
介抱を為さーめんとすれば弟室ゆ入ると早く臧姑喚て外ゆ去らーむ大成
せんすべ無く干媼を頼て母の介抱をさせんとて干媼が門ゆ入て泣て其事
を訴へ折ふ珊瑚幃中より出て成長て大成大ゆ慚て言ざーて出んとする
を珊瑚両ゆ袂を扉をさへて大成急ゆ道をそ出行けるとても家ゆ
帰て此由を語らざりけるとて干媼来て病を看るゆ母喜て此を止め
て宿せーむ是より日毎干媼が家ゆ人をおこせ旨を食を干媼が内ゆ送
る干媼媳ゆ言を傳へて心を費せるゆ是と云さべども食を送るゆ休む

時に干媼此食を病者に進む病をうく宜し時干媼が孫母のいひつけ
ありとて佳き食物を持ち来て疾いかと問ふ沈氏歎じて曰賢なる哉此
婦あく如何の幸有て斯る媳を得る玉つるぞ干媼が曰妹汝さるを恣媳
も如何ありー沈氏が曰珊瑚は弟の婦の如くあるまじ然れども甥婦の賢
及ばぬまで干媼が曰珊瑚が在ー時は汝若労を知らぬ汝怒れども珊瑚怒
ざいかんぞ我婦に及ばぬとかや沈氏泣て悔て曰珊瑚は嫁せりや未嫁せざる
や答て曰我も知らぬ人に訪ねと云ふ数日ありて病全く癒ければ干媼帰
らんとする或沈氏泣て留て曰姉去て玉へ我ゆく死せんず干媼大成と
相謀りて二成と居宅を分んとするを云臧姑に其を欲せばや有ん大成と干
媼の或罵る大成浪田を以て弟に與へんと言ふ臧姑喜て

其時家財を分つ書をあらためて渡す干媼此日家に帰て翌日
車にて沈氏を干媼が家に迎へ座ぶく沈氏来て先甥婦に見へんと云ひく
甥婦の德を譽る事ぶりる干媼が曰小女子善ふ有とも少しの疵
もあらんや吾て是を憐れく媳とも汝媳あらく我媳の如くありとも汝
憐て長く保つる能ず沈氏が曰あるべし宛あり我豈嗅と香とを知ぬん
や干媼が曰珊瑚が如き者を追出て念ふるも無き汝さえ言所ふべし
ぞ沈氏曰珊瑚ー甥婦の如くあるまじ我いかで念ぜんん干媼が曰然ばこそ言聞
さん向に遺る所の食ハ并に病中の事を助つる者ハ我媳也非ず汝が媳あり
沈氏驚て其説いかと問に干媼が云珊瑚我家に在る久ー是ぞ汝に送
やつるめん皆渠が夜どに績る料ゆくせーの為沈氏聞て泪を流ー

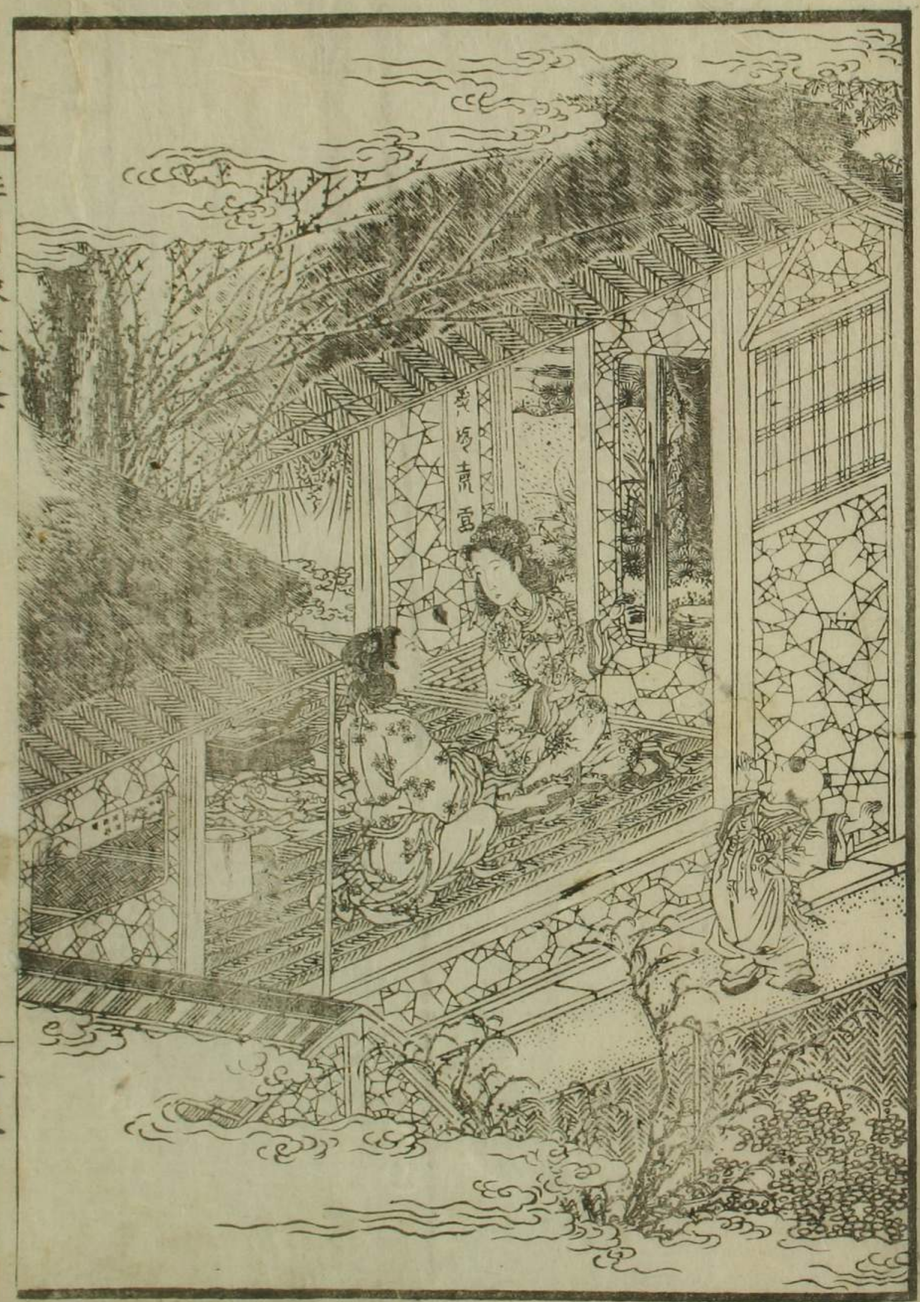
我何を以てか媳が面を合せんと云干媼珊瑚を吹ば珊瑚保を含て出地に伏
して禮をなすと母いたく慚てこづかう胸を打て成干媼之を止む遂に初の如く
姑媳とも十日ばかり止て居て遂に誘ひ連ごして家に帰りて大成家
内いとゞ薄田いとゝ持ことゞ其日を暮もの足らぬ二成が家へ大に富てあと
ぞ大成が貧を助けど兄弟垣を隔て住居ことゞさとゞの藏姑がさゞるを母
が及ばざりしを是ども生ことつきこる虐心なことゞ夫を始め婢を罵ること甚く
婢遂に終て死を婢が父藏姑を官に訟へ二成婦に代て官に出ひ
て大に呵責を受て藏姑も械を受て十指の肉をくゞく脱せり二成田畠
を質とりてもひしく慚く釋ことて家に帰ても其後債家の催促
堪ぞ是非なく良田を以て村中なる任翁と云者に鬻く任翁田の半大

成が譲ることを所なことゞ大成を呼て券の判をさせ大成任翁がもとに至る時
任翁忽氣色かはて大成に向て我おそ汝が父の安孝廉なことゞ任某何
者なことゞ今吾田地を買うとすると云て又曰眞間汝夫妻の孝に感
暫時汝等に逢ることを赦せり大成曰父靈あらば拝べ吾弟を救玉へ
父曰逆子悍婦惜むに足らぬ汝家に帰らば速に金をそのく吾血産を贖
ふ爲ーー大成曰母子辛うじて世をこすことを何とかヨヌくの金をねんや父の
曰紫薇樹の下に金を埋て置て取出して用へべーと云に再問んとすること
ぞを又語らぬ任翁夢の醒ること如く正氣付ぬことゞ已が言ることを知らぬ
大成辭して帰る藏姑聞て入を驚きことゞ紫薇樹のもとに往て窖を發て
見るに薄石のみ有て金なし本意なく家に帰ぬ大成是を聞て

母と妻とを戒め往て視るるとて扱ふも無ろと聞て母窃に
往て窺ひるるに磚石土中に雑りてあるのみなれば遂に帰る珊瑚ひきつ
づきて往て見るに土中悉く白鏹なり夫を呼て掘せむるに果して
銀弟大成あり二成を召て均しく銭分ち各嚢に入て帰り臧姑
夫が持帰る嚢を開るに嚢中に瓦礫のみあり皆人大に駭く臧姑
夫を兄の家に遣りて窺へしむ兄金を几上に置て母と共に相慶て
居り入て兄に語ると大成も大に駭き此金を取て二成に與ふ二
成往て債家に返し兄の徳を賞す臧姑曰身に覚あるにそ誰か一旦分ち
取る物を又あらぐく譲るあり有んやと云て聊之を恩とせず次日債主
が家より僕来て曰償所の金皆偽金なれば此夜官に訴へんと云夫婦

色を失ふ中に臧姑が曰我元より兄の賢此事に至らずと想へるに是
なるに汝を殺さんの計なりと云二成大に惧て債主に往て謝す田畠
を賣て券を渡し始の彼偽金を取て家に帰て細に視れば鉄を切
て改めたる銀二枚あり見るに韮葉の如く薄き金に銅を裹たる物なり
臧姑二成と計て断る物を已が家に留め餘は兄に返し送る大成其
意を知らざれば再三譲て受ず二成堅くいなむて置て去れば大
成此金を秤て見れば五両あまり少なれば珊瑚に命じて其數を満て
に推て債主の家に至て弟が入れし田地の代を償ふ債主二成が金
又疑ひ疑ひて是を驗見るに紋色足て相違なれば金を収
めて大成に券を返し又二成は兄に金を還して後意に偽金

二成千媼が家に來て大成の誤を珊瑚に示す圖



あるべきうらやましんと想ひ居るに兄債主に金を還し舊業残
つの贖つまと聞く大に之を奇む藏姑又疑ひを生じ其金を掘つも時大
成先真金を得て隠匿あるべしと大成が家に往て責て罵る
大成此時漸く金を反考へ故を悟て知る珊瑚藏姑を迎へて笑つ曰
産は固しるも此に在て何ぞ怒て残ると云て夫をして券を出させ藏姑
に渡し遣り此夜二成が夢に父来て責て曰汝不孝不弟なり一寸の地も
汝が物と為べき非ず然る残強て取んとせるやと云て怒る事甚しと
見て醒て後藏姑に語て田畠を兄に返さんと云へば藏姑愚なりとて
嗤ふ時に二成両人の男子あり何ぞ無くて長男痘を病て死り藏
姑夫の夢を想ひ合せ惧て二成をして券を兄に贈らしむ大成受ず又

幾ばくも無く次男又死り藏姑いよいよ惧て自券を嫂の所に持ち往て
置て帰りぬ春きぬに盡んとすれば田を耕す者なければ大成已夏を得
ずして之を殖種藏姑此より行を改め母に仕へて孝を致し嫂を敬ること亦
至て未半年を過ず母病て卒す藏姑哭して慟して曰姑早く死て我
をして事へるの残なるしむ是天我不孝の贖を許し玉へざる也と泣て哭
けば藏姑産をること十度なれども皆育ずして遂に兄の子を以て子とす
大成夫婦皆壽を以て終て三子を生に皆進士に舉られ人是を
孝友の報なりと云々

尾定

奇説排門録巻之一軸